エミリ・ブロンテ
―死―

八十木　裕　幸

周囲の人々からの助けや治療を拒みつづけたエミリが、いまわの際に、もし医者を呼ぶなら今見せます、と姉のシャーロットに言ったことは、彼女の心が現世に対する愛着を放棄し、「きらめく真実の世界」[1]への「飛躍」を渇望したかのように思える。それはちょうど「嵐が丘」十六章・三四章に書かれている二人の死顔を連想させる。

> キャサリンの額にはしわもなく、瞼は閉ざされ、唇には微笑みが漂っていました。どんな天使でさえ、彼女ほど美しくは見えなかたでしょう。そして私も彼女が身を横たえている永遠の静けさを味わいました。[2]
>
> 私は額にかかっている彼の黒い長い髪の毛をとかしてやりました。彼の眼を閉じてやろうとしました。できることならほかの人が見ないうちにあの恐しい生きているような喜びに見開いた眼の光を消してあげようと。でも眼がどうしても閉じようとせず、まるでそうする私を嘲笑っているようでした。それにその開いた唇や鋭い白い歯までが嘲笑っているようでした。

あきらかにこの作中人物二人の死顔には相違がある。一方は恋しながらもどうすることもできず息絶えた女の安らかな死顔、他方は悪魔の生命を与えられて生きたことに満足した男の死顔。そしてエミリ自身が〈死〉に直面したときの自己放棄と思える態度。この三者の〈死〉から、エミリ自身にとって〈死〉とは何を意味したのか考察すること

にする。

（一）

次の詩は彼女がロー・ヒル・スクールでの教師生活に耐えれず、ハワースの牧師館に帰った後に書かれたものであるが、いかに彼女がヒースの生い茂る荒野を愛していたかを切々と訴えている。

どこに行くのかわたしのやつれはてた心よ
無数の地が今あなたを招いている
近くそして遠く離れている地が
あなたの休息の場　疲れはてたわが額よ

……

家は古び　樹々は葉を落とし
月もなく　霧立ちこめる夜空を覆う
だがわが家の炉辺　これほどなつかしく
これほどいとおしい場所が　一体どこにあろうか

小鳥はさえずることなく　石の上にとまり

壁に這う湿った苔は　水滴を落とし
庭への道には　雑草がおい茂る
わたしはそれが好きだ―どれほど愛していることか[4]

広い草地、四方を取り囲む山脈、起伏する丘、草を食む羊の群、人間に乱されることのない澄みわたった大地、心地よく抱いてくれる甘く、柔らかな大気。このような自然にエミリは時を忘れ、われを忘れ、自分ひとりだけの想像の世界を展開していった。

マーガレット・レインによると「エミリは自分自身の気質によって、瞑想にふける独房にすでに閉じこもり、自分達の狭い領土外では生活できないほどのめずらしい人間であった。彼女はまるで自分が意志に反してこの世に生まれたかのように、牧師館のもつ、拘束的で耐えうるほどの閉鎖性を熱望した。ハワースは子宮だったのです。」[5]

また小説「嵐が丘」の「シャーロット・ブロンテによる序文」の中にも次のように書かれている―

…彼女の故郷の丘は、彼女にとって、ひとつの景色以上のものであった。そこは、野鳥やヒースと同じように、彼女が、その中に、そしてその傍に住んでいた所であった。だから彼女の自然描写は、あるべき姿、あるべき姿そのものであった。[6]

(二)

エミリは社会に眼を向けず、まったく孤立した世界に閉じ籠っていた。そのために自然との交流がますます密接になり、なればなるほど自然の秘める神秘の輝きを感知し始めた。彼女にとって自然は友であり、霊交の場であった。

次に挙げる作品はゴンダルの詩の中に出てくるもので、オーガスタが恋人ジュリアス・ブレンザイダの死を悼んだものであるが自然の木を扱いながら人間の生命そのものの宿命観、そこから派生する永遠の生命を詠っている。

無情な死よ　若葉がしおれ　しぼんで行く
夕べのそよ風が　今までどおりもとにもどすかもしれぬ
いや　朝の日ざしが　わたしの苦脳を嘲う―
時はもう　わたしのためには　二度と花咲くことはない！

それを打ち倒せ　枯れた若木が茂っていたところに
ほかの大枝が茂るように
こうして　少なくともその朽ちゆく屍は
そこからわきでたものを　養い育てていくだろう―永遠[7]

はかない生の実相と死の厳然たる事実をみつめ、「この世の煩いはもうわたしを悩ますこともなく、この世の歓びも無とはなるであろう。」「人生は永遠に比べれば無に等しい」[8]という挫折感、「夕べのそよ風」が暗闇へと導き無限の世界へ引き入れ、「暗闇と栄光は喜びとして溶けあい　大地は天にのぼり　天はくだる」[9]という天上と生との合体、言うならば、永遠への渇望を詠っているように思える。一方、「朝の日ざし」が現世の自由なき牢獄へと引きもどそうとするがエミリにとって現世は荒涼たる砂浜であり、苦脳と虚偽にみちた「空虚な世界」[10]であり当然現実との惜別を望んだ。そして永遠の生命を求めたのである。次の詩でも昼と夜との相関を透して述べられている。

まぶしい太陽が
地上をふたたび喜びに包んだのに
おお！なぜ　あなたにちはことごとく去り
砂漠のような空を残して行くのか

夜どおし　あなたのすばらしい目が
わたしをじっと見つめていた
わたしは心から感謝の意をこめて
その見守る神々しさをあがめた

わたしの心は和み　あなたの輝きを飲みほした
それはわたしには命であり
海上のうみつばめのように
様々に変化する輝きに酔いしれた

……

なぜ　朝日が昇って
これほどすばらしい　清らかな迷夢を解いたのか
なぜ　あなたの冷やかな輝きが触れた穏やかな頬を
火で焦がしたのか

……

エミリ・ブロンテ（八十木）

おお星よ夢よやさしい夜よ
おお夜と星よ戻ってくれ！
この敵意ある光からわたしを隠してくれ
それは暖めるのではなく焼きつくす―

それは苦脳する人間の血液を消耗させる
露のしずくのかわりに　涙を飲みほす
目もくらむ支配のあいだわたしを眠らせてくれ
あなたといる時だけ眼ざめさせてくれ(11)

先に引用した「死」という詩においての〈時〉は〈永遠〉の生命に吸収されるものであり、その媒体をなすのが〈死〉であると考えられる。〈時〉は〈無情な死〉を迎えることによって、〈二度と花咲くことはない〉。〈時〉を打ち倒すことによって永遠の活力を得て、大枝が若木を吸収し、若木は枯れることによって大枝を茂らせる。〈朽ちゆく屍〉によって〈永遠〉の生命を得ることができる。〈死〉はこの有限の世界を無限の世界へ結びつけるものであり、法悦への世界へと導くものである。

このようにエミリは自然を友とし安らぎの場所としたのみでなく、その内に秘められたさまざまの神秘を瞑想によって拡大していった。友もなく牧師館からあまり離れることのないエミリにとっては、自然との語らいが唯一の楽しみであり自己の生を感知するときであったのであろう。そして自然の中での瞑想への願望が心の奥底深く強くなっていったと思われる。だがいかにそのことによって強い世界観、信仰を持とうとも現実世界から逃避できなかったのは

当然であろう。次にあげる詩は自然との触れ合いの中で、現世に対しての無有愛、人間のどうすることもできない運命的悲劇性を詠っている。―

長い一日の不安に疲れ
苦脳から苦脳への地上の変化
当惑し　絶望しかけるとき
あのやさしい声がまたわたしを呼び戻す―
ああ　わたしの真の友　わたしはさびしくはない
その声で語りかけてくれる限り！

外の世界に望みはなく
内なる世界が倍もすばらしい
偽り　憎悪　疑念に満ち
冷やかな疑念の起こらぬ世界
あなたとわたしと自由とが
当然の統治権をもつ世界

……

あなたはいつもそこにいて
舞い飛ぶ影像を連れもどし
傷ついた春に新たな輝きを吹き込み

エミリ・ブロンテ（八十木）

死から快い命を呼び起こす
浄らかな声でささやくのは
あなたと同じ輝く真実の世界

あなたの見せかけの至福を信じはせぬ
でもやはり夕方の静寂の時には
いつも変らぬ感謝を抱き
あなたを喜び迎える　恵みの力
人間の不安の確かな慰安者
願いが絶望となるとき　さらに明るい願いとなる(12)

エミリにとって現世はいつも〈偽り、憎悪、疑念〉が満ちている世界であり、人間は「うわべだけで、卑屈で、誠意がない。しかし自分の心を信頼し、そこに同じ堕落を見つけるのはもっとやりきれない」(13)と詠っている。人間が崇高に生きようとすればするほど非情に出会い、非運をめとり、誠実を友とするが、その高貴さのゆえに裏切られる思いがするように、エミリは自然に身を沈めれば沈めるほど外界を阻隔するようになったのである。さらに人間が大海原に面したときに限りない世界と永遠性と絶対的なものを感得し敬い崇めると同じように、ハワースの荒涼たる原野に身を置くことによって自我を解放し吸収させ、無制限的な自己の永続を希望したのである。すなわち自然の中での瞑想によって現世の虚無と精神的限界を知り、自然の奥深い神秘の中に自己実現をはかろうとしたと思える。当然現世での人間生成とはうらはらな方向へと進み、強い希死念慮が生まれ、永遠の生命の讃歌への憧憬となったといえる。

(三)

人間は絶望が増大してある極限に達すると、絶望に陥る知覚は減少し、別の希望のうちに生きるという現象があらわれるという。この希望とは「あざむかれることのないものであり、新しい将来をひらくかのようであり、時間を超越し未来を確保するという意義をもつものである。このように人間は常に絶望する可能性に対する希望なのである。自分の身辺の幸福を守るために夢中になっていたときに見えなかったものが、絶望・失意のときには見えてくる。従って、人間にはたとえ宗教的でなくても、失意のうちの、いわば一種の祈りが重要なのかもしれない。それは生きられた内面化と誠実な沈潜であり、そこから立ちのぼるものは人間性のもっとも深いところにあるものである。それは希望の原型であり、その方向は世界の彼岸を見つめることであり、人間にとっての新しい力のつきせぬ源泉であり、永遠的なものの観念がられわれに湧きあがるのである。」[14]まさに、エミリが自然の不変性、絶対性を透して、現世に対する絶望や倦怠を感じた結果、生じたことと同じである。それは現世ではどうすることもできない内的自由、そのことに起因する自由の渇望、自由を獲得するための〈死〉、さらに時間を超越しての永遠性の宿る魂との合体である。彼女には「やすらぎの場所はひとつを除いてなかった　それは墓場！」[15]であった。彼女は「時と死と生の苦痛」[16]を次のように詠っている—

……墓の向こうに　いかなる世界があろうとも

この生まれた大地を去ろうとは思わない
いや―むしろあなたのやさしい胸に
横たえられてとこしえに眠ろう
目ざめたら　あなたとともに
不滅の生命をともにしよう[17]

「この生まれた大地を去ろうとは思わない」という表現は単純に現世に対する、執着心とも解釈できるが、そうではなく、ハワースの荒野に見出した様々な歓びを逃しはしない　すなわち自由への渇望の媒体とも解釈できる。「あなたのやさしい胸に…とこしえに眠ろう」とは天上の世界に安らぎを求めている。さらに「目ざめたら…」は新しい生命が無限の世界に生きることを意味している。しかし、この詩においてはまだ「魂は臆病」であり、永遠の世界への強い欲求を感じさせない。むしろこの詩の四ヵ月程前に書かれた詩「老克己主義者」の中では一歩踏み込んで神秘の世界での自由を強く望んでいる。そればかりでなく死を肯定し転生の可能性を予見しているようである。

……
わたしが自分のために祈るとしたら
唇をついてでる唯一の祈りは―
いまわたしが耐えている心臓に触れないでくれ
わたしに自由を与えてくれ―

ああ　束の間のわたしの命が終焉に近づくにしたがって
わたしの切にもとめるものはただ―
生と死をとおして堪え忍ぶ勇気のある
束縛なき魂[18]

彼女にとって〈死〉とは「本当に胸が冷たくなるとき　その囚われの魂はよみがえる　土牢は大地と一緒になりとらわれた人は空と一緒になる」[19]であった。肉体的解放によって、現世に拘束されていた魂が生命を授け、現世という束縛がはずれ、牢の狭い空間を包む障壁もとりはずされ、すべてが一体となることであった。自由を奪うのが牢なのである。これがエミリにとっての死であり、自由への解放であった。このことによって無限の絶対的魂と一体となることであった。エミリは、エッセイのひとつ「蝶」の中で次のように書いている―

「生命は破壊の原理の上に存続する。あらゆる創造物は他のものに対しての無情は死の道具であるにちがいない。つまり自らが生を閉ざすにちがいない。…わたしにとって、宇宙は悪を生み出すためにのみ築かれた広大なからくりに思えた。さらに　天から送られ、とがめようとしている天使のように、輝く金色や紫色の大きな羽根をもつ蝶が木々の間を舞った…ここには来たるべき世界の象徴がある。ちょうど醜い幼虫がすばらしい蝶の前身であるかのように、この天体は新しい天と新しい地の萌芽期である。そしてこの貧弱な美しさはとめどもなく人間の想像にまさっている。彼女は神学的結論としての伝統的例証を用いている。　神はまさに正義と慈悲の神であり、　苦脳は神聖な報いに対する種子である。」[20]

この中でエミリは明らかに現世は悪の巣であり、人間にあてはめれば「苦脳と狂気、悲哀と罪」[21]が渦巻くところだとみなしている。そういう世界を破壊することはたとえそれが無情な〈死〉であっても、新しい命が生れ出るには必要なことである。言うなれば蝶が幼虫という囚われの世界から脱皮し、美しい羽根を身に付けひらひらと思いのまゝに舞うように。そこには幼虫の脱殻という〈死〉があっても真実の〈死〉はない。逆に〈生〉に続いているものである。このように究極的〈生〉への願望は閉じ込められている状態からの身体的脱却の成就であり、それに伴う精神的自由の希求なのである。さらにエミリの想う〈死〉の世界は「おお私を死なせておくれ　力と意志とが　その残酷な戦いが終り、打ち負かされた善と　勝ちほこる悪が　ひとつの休息の中に消し去られるように」[22]と詠っている。すなわち彼女には〈死〉の世界が安らぎに満ちた世界であり、個人と宇宙の合一した恍惚の世界であったと思われる。

エミリは永遠の自由を荒野に求めたが、当然そこには自由を導く媒体が必要であった。それは単なる肉体的〈死〉ではなく、天上に導く〈信〉であったと思われる。この〈信〉を認識したからこそ無限絶対のものへと飛躍をはかったのである。彼女を取り巻く自然が〈信〉を維持する志操の源になったのである。彼女が〈死〉を直視し渇望しつづける中において、瞑想に耽り深まるにつれて様々な幻想を抱くようになったのである。彼女はその幻想の中に絶対的〈信〉を見出したと考えられる。〈信〉を絶対視することによって自由の願望の魂を自然に向けて躊躇せず投げかけたのである。次の詩はその魂を荒野に向けたものであり、彼女の精神が永遠なる世界へと没入していった刹那を表わしているように思える。

大底の事物が遠ざかるとき　私は最高の幸せを感ずる

風さわぐ夜空に月光が輝くとき　肉体の宿りから魂をいだく
眼は浄明の夜空をさすらう―

わたしが無となり　だれも傍にいないとき―
大地も海もまた雲ひとつない空もなくなるとき―
ただ魂だけが　無限の空間を駆けめぐる[23]

〈信〉に対する絶対的精神を抱き神的衝動を感じるとき、心は外見的有限世界の殻を破って永遠の境涯に入り、その大気を吸うのであるが、まさに彼女は無限の空間を駆けめぐり歓喜の大気を吸ったのである。もし彼女が現世における自己浄化を超越していなければ、この境地に没入できたはずがない。むしろ感覚の力が精神を圧倒し現世との境界に精魂がただよったであろう。彼女の精神は自然に慈くしまれ純乎たる光を持っていたのである。魂が自然を憧憬しその内に恩寵を求めあがいているにすぎないように思われる。さらに池に小石を投げこむと波紋が際限なく拡がっていくように魂の無限の円の拡大を予知はしているが無限の栄光を感得しきれていないように思われる。彼女は魂の飛躍の世界を自己の上に感じる煉獄の世界にいるのである。この詩は彼女が精神の絶対自由の境地を渇望しつづけた結果として詠んだものであり、絶対者を自然の内に予見したと判断できる。なぜなら現世で拘束されている人間に触れていないということは有限世界を超越し、瞑想し、神秘の世界に没入した証拠である。このように、自然の中に神が存在するという汎神論的思考にもとずく作品がエミリにはいくつかある。「その時　山の頂から滑るようにぼんやりとした精霊が近づくのを見た…溶けるみぞれのように　音もない足どりで　白く輝いた瞬間　消えてしまった。[24]」エミリに訪れた一瞬の精霊との交流である。精霊の超自然的存在に対し警嘆しているようだが、魂の存在自体

に対する彼女の疑心は感じられない。むしろ精霊の世界の持続を望んでいるように裏面から見ることができる。次にあげる詩は彼女の魂が自然の中に受け入れられていることを表現しているし、自然界の魂との触れ合いを感じさせる。

わたしのつぶやきに　生い茂る木の葉は
夢のように　さらさらと音をたて
この無数のささやきが　ことごとく
精霊で満たされているようだ(25)

エミリは宏大無限の精霊世界で神秘的経験をしたが、拘束に満ちあふれている現世に引き戻されたとき、当然次元の相異による魂の葛藤を生んだと思われる。彼女自身の魂が絶対的境地の魂と融合するためには、さらに自己を浄化しなければならなかった。そうすることによって理想郷への登はんが必然的に天国への飛翔へと繋がったからである。さらに絶対的精神をもつ魂が無限に拡大するために、他の人間達と拘わらず自分の障壁内に立てこもり孤独の瞑想に耽けるようになった。しかしこの瞑想の段階では明瞭な意識と不分明な意識、自己放棄欲と自己主張欲とが相互に争い混迷しているが、彼女はこれを超越した世界を求めていったのである。しかしその世界には両極間に濃淡陰影があり、純粋な自己の魂を没入することはできなかったはずである。そのためにエミリは瞑想に耽けきれず、たびたび現実に引きもどされたのである。次の詩にはその苦脳が書かれている。—

思索はもう充分だ　哲学者よ
あなたはあまりにも長い間　夢想させつづけた
光もささぬこのわびしい部屋で
夏の太陽がさんさんと降りそそぐなかで—
宙をかけめぐる魂よ　どんな悲しい文句が
またあなたの瞑想に結末をつけるのか

ああ　わたしがだれであるかもわからずに
眠れるときがくればいい
どんなに雨がわたしをずぶぬれにしようとも
どんなに雪がわたしを覆うとも　少しもかまわない

どんな約束した天国も　こんなにも激しい願いを
ほとんどいや半分も満してはくれない
消せない焔の地獄で脅されても
この抑え難い意志を制してはくれない

—そうわたしはいった　今までも同じことをいっている
—わたしの死に対して　絶え間なくいうだろう
この小さなからだのなかの　三位の神が
昼となく夜となく　たたかっている

エミリ・ブロンテ（八十木）

天はこれらすべてを　抱えきれず　だが
それらはみな私の心の内にある
わたしが今の存在を忘れるまで
わたしのものであるにちがいない

ああ　わたしの胸の内で
神々の戦いが終わる時がくればいい
ああ　安らげる日がくればいい
もうこれ以上苦しめないでくれ！[26]

「嵐が丘」の中にも「安らげる日」を求めるヒースクリフの姿がある。この小説の中で最も重要な要素を成しているように思うのだが、それは〈地獄から天国へ〉の願望である。ヒスクリフの愛したキャサリンが「あなたを摑んでいられたらいい、私達が共に死ぬまで」[27]と衰弱しきっている身体を彼の両腕に抱きしめられながら、彼の髪をつかんで離さない。一方ヒースクリフは自分達が愛し合いながら、別れ別れにならざるを得なかったのは、自分を気違い扱いした周囲の人間達であり、彼女の自己欺満のためだとなじる。「悲惨も堕落も死も、神や悪魔が加えてくるどんなものも、別れさせることはできなかったはずだ。君が、自分の意志で、そうしたのだ。おれが君の心を引き裂いたんじゃない。君が自分で心を引き裂いたのだ。君の心を引き裂いたときに、君はおれの心を引き裂いたのだ。」[28]キャサリンの死後十八年間、彼は周囲の人間に復讐しつづけ、彼女の亡霊と一諸に暮して来たようなものだった。自分の思い通りになると、彼の所有欲は消え、気力はうせ、食欲さえなくなっていった。彼に何か不思議な変化がしのび寄り、

その影にのみ込まれていった。彼はいう、「おれにはただひとつの願いしかない。おれの肉体と全精神力とが、それをはたそうとのぞんでいる。これほど長い間、これほど傍目もふらずこがれてきたのだから、そこへ行ける。しかもすぐに、　とおれは確信するようになった。なぜならばそれはおれの存在をのみこんでしまい、おれはそれが達成するという予感のなかに溶けこんでしまっているのだ。……おお神よ、何という長い戦いなのだ！もうおわりにしてくれ！」[29] 彼の内体験がこの言葉に凝縮している。「そこ」とはキャサリンのいる天国であり、いま彼がいる所は地獄である。彼はこの二つの世界が融和し、太陽のように白く、明るく輝く広々とした喜びの深海へと飛翔しようとしている。これはキャサリンとの合体の地であり、ヒースクリフトの世界でもある。彼に残されたのは自己を浄化し瞑想に耽り、その理想郷への登はんだけである。彼の顔全体に歓喜がみなぎりあかるく陽気な表情と、目には不思議に歓ばしげな光がさしている。ヒースクリフはいう「ゆうべ、おれは地獄の入口にでかけた。今日は天国の見えるところまできた。それがおれの目にはみえている。ほとんど三フィートと引きはなされてはいない！」[30]「おれの魂の歓びは、おれの肉体を殺してゆきながら、まだ満足はしないのだ」[31] 自己の浄化の状態が進み、さらに「おれは、おれの天国に、入りかけているところだ。ほかの人間どもの天国など、おれには何んの価値もないし、行きたくもない！」[32] 悪鬼とみなされたヒースクリフが自己にかせられた悪の投影の姿から脱却し、自己の天上に眼を輝かしている。さらに自から魂を神との合体へと接近させていこうとしている。

見えないクモの巣にかかって、もがいても抜けでれない状態から、何かが身体の中にさし込んでくる感覚に捕われている。この状態が生命的自我をうばい、暗黒の深洲から浮かび上がる「虚の力」に動かされるのである。非我が消滅すれば自我もなくなり、自我の意識を滅却すれば、自分との間に横たわっているそとの世界の外存性もまた消えるので

ある。そこには自と他との分離のない即自的混沌があらわれ融合意識の瞬間が訪れるのである。エミリはこの時「おお、私に死を、力と意志との残酷な戦いが終りを告げるように、打ち負された善と勝ちほこる悪がひとつの安らぎの中に失せるように」[33]と詠っている。明らかに「力」という非我、つまり自分以外の存在と、「意志」つまり自我との融合を渇望している。さらに「打ち負された善…」とは人間の二大生命地層である自己主張欲が自己放棄欲に打ち勝ったことを意味する。すなわち、自我の滅却否定によって自我一体の窮極的境地を求めるのではなく、逆に自我を解放して普通的生命と一致させることによってこれを得ようとしているのである。生を自ら棄て、我執を棄て、根を失った無の世界にでてしまえば、なんの主観的評価からも煩わされず万物をあるがままに眺めながら、万物の中に自分を蒸発できる。そのような生命的感情の枯れていく人間は、自分からもとめずに無の世界に入れる。しかしこのような超越的神秘主義に基づくものではない。生命的な自我が自分をさえぎる枠を除くことによって流れ出し、あらゆるものにいきわたり、ひとつになる、そういう自我の開放なのである。エミリのいう「生まれた場所を去りはしない…目ざめるとしたら、おまえとともに、不滅の生命をともにしよう。」[34]である。さらにエミリは次の詩でこのことを詠っている。

見知らぬ永遠の世界へ奥深く
わたしの希望の錨をおろそう
わたしの魂に根気づよく
あるべきものを求めさせよう[35]

煉獄の地にあって自己の生命を燃やそうとしている。明らかに、自分の肉体が喪失しても神人合一的な自我融解感

を求めているのである。それはちょうど、「嵐が丘」の中でキャサリンがどんなにヒースクリフを愛しているかをネリー・デイーンに話すところと同じである。「…彼を愛しているのは、彼がハンサムだからではなくてね、ネリー、彼がわたし以上にわたし自身だからなの。わたしたちの魂が何んで造られていようとも、彼とわたしの魂は同じなの…」[36] キャサリンはエドガーと結婚を決めながら、同時にヒースクリフと今結婚すると品位が下がるとも言い放っている。キャサリンの利己主義的自己欺満とヒースクリフの悪鬼のような性質。この両者の恋愛は、プラトンのいう、恋愛とは「神的狂気」にほかならない。キャサリンを祈りに似た心持ちで熱愛し、彼女の側にいると天国にいるときのような自分を感じるのである。恋の相手が自分を愛してくれていると知ったとき、両者は自己の存在の根源を相手の中に移し入れる。恋人が自分の所有になるとき、恋人が自分であり、自分が恋人となるのである。スタンフォードは次の詩を「英語で書かれた他のいかなる詩も、このように完全に神秘経験を表わしているものはない」[37] と言っている。

そのとき目に見えぬものが見えだし　真実がその見えぬものを見せる
わたしの肉体の感覚は高まり　わたしの心の感覚は感ずる—
その翼はほとんど自由であり　その住み家　その憩の港を見つける
深みを測り　身をこごめ　最後の飛躍をする！[38]

エミリは自我への執着をはなれ自己を解放し自然に自己を委ね、自己を実現しようと「最後の飛躍」をしたのである。彼女に本性から恩寵への入口が開かれたのである。彼女は〈死〉の門を通って魂の混入る世界に入るとき、魂の

生には何んの変化もなく、ただ閉じこめられた自我が解放される、という変化のみである。この段階ではいかなる妨害も中断も知ることはない。なぜならすでに自我感を離れ汎世界的生命に入っているからである。おそらく内面的自由の領域が限りなく拡がってゆくのを経験したであろう。

この詩について、サマセット・モームは次のように書いている。「この詩は、個人的体験から知ったことを話っているのではない、と信じられないほど神秘的経験について述べている。無限なるものとの合一から現実に戻るときに感じる苦脳を表現するとき、神秘家が使う、まさにその語を使っている。『おお、突然の妨害はなんと恐ろしいことか、その苦脳の強烈さ、耳が聞えはじめ、目が見えはじめるとき、鼓動が打ちはじめ、頭脳がまた考えはじめるとき、魂が身体を感じはじめ、そして身体が拘束する鎖を感じはじめるとき』これらの詩行には、まちがいなく痛切に感じた経験が表わされている。」[39]さらに詩はつづき、エミリが求めていた安息の地の情景が写しだされる。

人間よ　お前が立っているそこに
精霊が立っているのを見た—ほんのひと時まえ
その足もとには　三つの河が流れていた
同じ深さで同じ流れの—

金色の流れ　そしてひとつは血のような流れ
もうひとつはサファイアのように見えた
だが三つの流れが交わったところで
それはまっ黒な海へ流れ込んでいた

その精霊はまばゆい視線を
その大海原の暗たんたる暗やみにおとしていた
それから―突然輝いて燃えあがり
深い喜びが広く明るく輝き―
太陽のように白く　分かれた支流よりも
はるかに　ずっと美しかった！[40]

エミリは「この精霊を長い生涯探し求めてきた。天国に、地獄に、大地に、大空に、それは果てしなき探求であった。この精霊の光輝ある眼ざしが自分の苦脳の上に一度でも光り輝くのを今までに見たことがあるならば、考えることをやめたい、生きるのもやめたい、と叫びを上げることはなかったであろうし、清められた忘却を呼び求めたり、死をこい願ったり、敏感な魂そして生ある呼吸と命なき休息とを交換したいと、哀願することはなかったであろう。」[41]とつづけている。エミリは天と地は融和できないものと意識していたが、瞑想によって自我を解放し、啓示を感得し、肉体的死を超越し、自らの魂が絶対的なものとなり、自他一体の窮極的境地の中で普遍的生命を得たのである。彼女にとって幻想は神聖なるものであった。彼女は囚われの牢獄での瞑想の一刻を脱し、愛のきらめく天上の息吹の中へと融合して行ったのである。次にあげる詩は、彼女が死ぬおよそ二年前に書いたものであり、「力と意志が残酷な戦いをやめて、打ち負された善と勝ちほこる悪がひとつの休息の中に埋められるように」と熱望した世界が描かれ、わたしのうちに宿る神」そして「わたしのうちに安らう命」を感得したと思われる。

……

エミリ・ブロンテ（八十木）

わたしはみる　天上の栄光の輝きを
信仰も同様に輝き　わたしを恐怖から守る

おお　わたしの胸に宿る神よ
全能の常にいる神よ
不滅の生命であるわたしが　あなたのうちに力を見出すとき
わたしのうちに安らう生命よ

……

広汎に抱く愛をもって
あなたの精神は永久の歳月に命を与え
天上にみちあふれたちこめる
変化し　持続し　溶解し　創造し　育てる

大地と月が失くならうとも
太陽と宇宙が消滅しょうとも
あなたがひとり残るならば
すべての存在はあなたの中にあるだろう

死の存在する余地はなく
死には無にする力がみじんもない
あなたは存在、生命そのものであり

あなた自体は破壊されることはない(42)

エミリにとって「天上の栄光の輝き」とは、自我を解放した魂を神が宿り、その神を自己の内に得ることができたことを意味するのだろう。それは不滅の命であり、この世の激しい苦脳が泡沫のごとく無価値であるのに比して、死の存在する余地もない時間と空間を超越した永遠の息吹きのある聖地でもあるように思われる。

(三)

以上の展開を通して考えられるエミリ・ブロンテの〈死〉の意味を総めることにする。

社会から離脱した状況のなかで内向的性格であった彼女は荒涼たる荒野を愛し、そのなかに自己の自由と歓びを見出した。彼女は自然との接触を通して人間存在の意味を理解する一方、現実に身近で起った〈死〉が一層人間の悲劇的宿命を感得させたと考えられる。彼女にとって疑う余地のない絶対的な自然との触れ合いが深まるにつれて現世に対する絶望感をつのらせ、その結果ますます自由への願望を強め、それが「地下牢の詩」になりキヤサリンの肉体に対する嫌悪となったと考えられる。現世からの解放の欲求は肉体的〈死〉さらに精神的解放へと表裏一体となって進み、幻想の世界へと彼女を導き入れ神秘的領域へ没入させる結果になったといえる。彼女がその自然になんの躊躇もなく自己の魂を投げかけ自我の解放を希求した結果であったと考えられる。彼女は自然のなかで時を超越し希望の使者

に出会い自己の魂を混入はできたが、それは殺郡的であり煉獄の世界に魂を漂わせ、時と生と死の苦脳をもたらす経果になったと考えられる。自我の解放によつて得れると考えた真の生命、それこそが永遠不滅のものであり永遠の安らぎへ繋がるものと彼女は考えたにちがいない。彼女が求めた世界は自我否定の天国ではなく普遍的生命をもち歓喜に満ちた聖地であったと思われる。そのために最後の飛躍をし神と自我解放の魂との融合を渇望し恍惚の世界へと没入していつたのである。彼女にとって〈死〉は過去や苦脳の消滅であると同時に真の生命を得るためのものであり、人間破壊を意味したのではないといえる。だから〈死〉の門を通って彼岸へ入つても魂には何んの変化もなく妨害もなく、さらに〈死〉の入り込む余地すらない世界とみなしたのである。彼女が最終的に瞑想し経験した法悦境は外面的世界においてではなく、魂の宿る内面的世界においてであったといえる。序文の三者の〈死〉は永劫不滅の生命を渇望した結果の現象であり、死が真の生命を生みだすと考えたからでかるといえる。

【注】

(1)「エミリ・ブロンテ詩集」（コロンビア大学出版局一九四一）No.一七四
(2)「嵐が丘」（モダン・ライブラリー一九五〇）一九四頁
(3) 同、三九七頁
(4)「詩集」No.九二
(5)「ブロンテ物語」（ウイリアム・ハイネマン社一九六四）一〇七頁
(6)「嵐が丘」序文二九頁
(7)「詩集」No.一八三

(8) 同、No.四一
(9) 同、No.五
(10) 同、No.一八二
(11) 同、No.一八四
(12) 同、No.一七四
(13) 同、No.一一
(14) 「人間の詩と真実」（中央公論社一九七八）一三六頁
(15) 「詩集」No.五八
(16) 同、No.一四九
(17) 同、No.一四九
(18) 同、No.一四六
(19) 同、No.一四八
(20) 「エミリ・ブロンテー人生と作品ー」（ビーター・オウエン・リミイテッド）六四頁
(21) 「詩集」No.一四九
(22) 同、No.一八一
(23) 同、No.四四
(24) 同、No.九五
(25) 同、No.一四〇
(26) 同、No.一八一
(27) 「嵐が丘」一八六頁
(28) 同、一八九頁

(29) 同、三八五頁
(30) 同、三八九頁
(31) 同、三九五頁
(32) 同、三九五頁
(33) 「詩集」No.一八一
(34) 同、No.一四九
(35) 同、No.一八八
(36) 「嵐が丘」九五頁
(37) 「エミリ・ブロンテ―人生と作品―」二二五頁
(38) 「詩集」No.一九〇
(39) 「十大小説とその著者」（ウイリアム・ハイネマン社一九五四）二三二頁
(40) 「詩集」No.一八一
(41) 同、No.一八一
(42) 同、No.一九一